短期集中連載

国産剣道具の新たなる思い②

日本武道具製造(株)
久慈(岩手)の工場を行く

撮影◆窪田正仁

さまざまな事情でしばらく製造が中止されていた神奈川八光堂のロングセラー商品である「A—1」だが、国産のオーダーメイドの商品は岩手県久慈市にある「日本武道具製造(株)」の工場にて新たに製造されることになった。

この工場が設立されたのは昭和46年。もともとは(株)ミツボシの工場としてスタートし、久慈市の誘致企業の第1号であった。当初は三船久蔵の生誕地で柔道が盛んな土地柄もあって柔道着をメインとしていたが、設立の5年後ぐらいから剣道防具にも着手。競合する企業の商品を日々研究し続け、後にミツボシの国産防具ブランド「峰」を開発製造し、発売されるや大きなヒット商品となった。「峰」は「A—1」同様に国産防具のトップブランドとして現在に至るまで幅広く剣道家に愛用されている。現在、この工場では剣道防具と剣道・柔道・空手・合気道等の武道衣を製造し、40名ほどの従業員を抱えている。

ここで製造される防具は「峰」だけでなく他社ブランドの製品も含めてほぼオーダーメイドである。国産防具としての品質を保

最先端の巨大な自動裁断機。コンピュータで数値を入力すると自動的に裁断をしてくれ、ある程度の厚みある物にも対応。アパレル関係のメーカーにはよく見られる機械だが、「防具業界ではここだけでしょう」と赤羽根要工場長は言う

防具の製造部門(下)と、衣類関連商品の製造部門(上)は別部屋になっており、衣類関連商品は合気道や空手着などもつくられている

持しながらも、各武道具店の独自の細かなオーダーに対応している。また、従業員は必ず複数の作業ができるようにし、品質と製造ペースが落ちることなく安定した生産環境を整えていると、工場長を務める赤羽根要さんは言う。

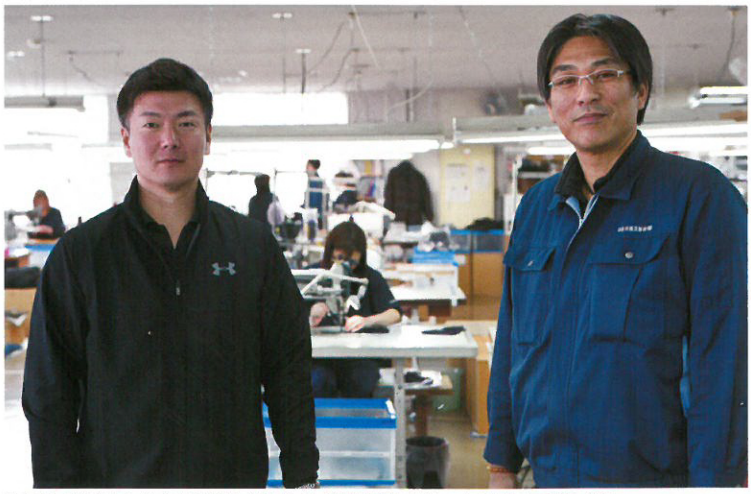
「オーダー」という細かな要望が入ってくる中で、そうした微細なところに応えられるのも日本人の技術があってこそと言えるが、それには道具と設備も必要。「設備投資に対する積極性はこの工場の売り」と赤羽根さんは語る。

「20年、30年戦士のものもありますが、ミシンはここ5年ぐらいで買い換えた最新のものばかりです。それによって、これまで縫えなかった素材が縫えるようになったケースもあります。職人技の伝統技術も必要ですが、機械化との両立を目指しています。機械化して職人の味がなくなってはいけませんが、そこは残しつつ機械化の部分とうまく融合していけば、今後の人材育成も効率化でき、製品の品質も向上し生産数も安定します。

新たな素材が出れば、それもどんどん取り入れています。実際に商品化されるのは何十個のうちのひとつかも知れませんが、それがヒット商品になるのです。古き良き商品も残しながら、そういった『失敗を恐れない』ところ、『とにかくやってみる』ところが、この工場のモットーです」

この恵まれた製造の環境下で「A—1」が今までを越えるクオリティーで新たな産声を上げる。

「ピッチ刺し」を生み出した工場と言われている日本武道製造株式会社


神奈川八光堂の有馬宗由貴社長（左）と日本武道具製造（株）の赤羽根要工場長（右）